

『シヴァ・プラーナ』の年代に関する覚え書

著者	神舘 義朗
雑誌名	滋賀医科大学基礎学研究
巻	2
ページ	b1-b23
発行年	1991-03
その他の言語のタイトル	Some remarks about the date of the Siva-purana
URL	http://hdl.handle.net/10422/1176

『シヴァ・プラーナ』の年代に関する覚え書

神 館 義 朗

緒 論

プラーナはインドが生んだ一種の宗教的文獻群であるが、その総数は一五〇にも達すると言われ⁽¹⁾、全貌は未だ充分に解明されていない。その中で特に重要視され比較的よく読まれてきたものが十八あり、これは時に「大プラーナ」(Mahā-purāṇa)と呼ばれて他のプラーナから区別されることがある⁽²⁾。これらの「大プラーナ」に対しては、それに次ぐ地位を与えられているものとして、やはり同数の十八プラーナが存し、普通「副プラーナ」(Upa-purāṇa)と呼ばれている⁽³⁾。ところが、この「副プラーナ」は「大プラーナ」に比べて学者の関心を惹くことが少なく、H・C・ハズラ(H. C. Hazra)を除けば「副プラーナ」を研究対象とする目立った専門家は皆無に近い。まして「大プラーナ」と「副プラーナ」以外の諸プラーナに至っては、その存在すら殆ど無視されているのが実情である。

さて、表題に掲げた『シヴァ・プラーナ』(Śiva-purāṇa)は、近頃まで「副プラーナ」に属するものと見なされ、従って存在感の薄いプラーナであった⁽⁴⁾。ところが、一九七〇年、『古代インドの伝承と神話』というタイトルの許に全ての「大プラーナ」を英訳・出版する計画が実行に移された時、その最初に訳出されたのが『シヴァ・プラーナ』であった⁽⁵⁾。以来このプラーナは遽かに脚光を浴び、次いで一九八六年、ローチャーが、ホンダ監修『インド文獻叢書』の一冊『プラーナ』に於て本書を「大プラーナ」として扱い、可成りの頁数を割いて紹介したことから⁽⁶⁾、このプラーナも漸く注目されるようになってきた。しかし、その年代、成立過程、インド思想史上の位置付け、等々の重要な問題には未だ疑問なところが多く、今後の究明が待たれている。そこで本稿では、特にその年代について気付いたことを書き留め、備忘かたがた今後の研究の一助に資したい。

一般に、プラーナの年代決定は何れのプラーナにとっても極めて困

難な問題で、『シヴァ・プラナー』の場合も例外ではない。本書については既にハズラが、その中に散在する手がかりを探捜し、構成している各〈集〉(samhitā)ごとに成立年代の推定を試みている⁽⁷⁾。けれども、それは試論と呼んでもよいもので、不備な点が少なくない。とは言え、今のところ彼に続く本格的研究は現れておらず、前記のローチャーが『プラナー』の中で本プラナーの年代に言及した際も、その記述は総べて右のハズラの研究に負っている。だから本稿では、各〈集〉ごとに先ずハズラの所論を摘示し、次に、それに対する論評を付け加えることとしたい。以下、ハズラに言及する場合は、特に断らない限り、右の論文を指すのである。

なお、『シヴァ・プラナー』には「六集本」と「七集本」とが存し、含まれる諸集も殆ど半分が違ふものである。そしてハズラによれば、「六集本」の諸集の方が「七集本」のものより古い成立である（四七頁註一）。しかし、主に流布しているのは「七集本」であり、上記の英訳も「七集本」に依拠しているから、本稿では「七集本」について見てゆくことにする⁽⁸⁾。

一、第一『ヴィディエーシヴァラ・集』 (Vidyeshvara-samhitā)

本〈集〉は「六集本」では第二集になっている。その年代をハズラは西暦九五〇年以降と見る。理由としては、(1)この集が『シヴェーターシヴァタラ・ウパニシャッド』を引用し、(2)星宿や七曜名を知っており、(3)ツラシー樹の聖性を認め、(4)五所礼拝法 (pañcayatana) を

勧め、(5)梵天崇拜の不人気に言及し、(6)ヤントラの承認といったタントラの要素を有していること、及び(7)本プラナー所収の『ヴァーヤヴィーヤ・集』を利用して見えること、が挙げられている。ところが、右の諸項は、その何れを見ても、『ヴィディエーシヴァラ・集』の成立を九五〇年以降とする積極的で確実な根拠になり得るものとは思われない。先ず、第(1)項に言う『シヴェーターシヴァタラ・ウパニシャッド』は、遅くとも西暦一〇〇年頃の成立である⁽⁹⁾。この場合、西暦一〇〇年頃の聖典を引用している書物の上限が九五〇年であればならない必然性は何処にもない。次に、(2)から(6)の諸項であるが、それらの事象が何時頃からインドで知られたり行われたりするようになったか、確かなことは殆どわかっていない。従って、これらの点も本〈集〉の年代決定に余り役立つとは言えない。最後の第(7)項については、ハズラのように本〈集〉が『ヴァーヤヴィーヤ・集』を利用したと見るべきか、それとも関係を逆に見るべきか、といった問題の検討が充分に為されていない憾みがある。その上、もしハズラの主張を認めたとしても、彼自身が『ヴァーヤヴィーヤ・集』の成立を西暦八〇〇—一〇〇〇年の間に置いているのであるから（六三頁）、この〈集〉から引用したとされる『ヴィディエーシヴァラ・集』の成立は、西暦八〇〇年以降とされなければならない。このように、ハズラの九五〇年上限説は厳密な論証に欠け、あまり説得的ではない。ただ、これを積極的に否定する有力な材料もないわけで、碩学の心証として尊重すべきものであろう。

ところでハズラによると、「七集本」第一章の第四句・後半以下、第二章、第三章の第一—五句、及び第一九—二五章は、「六集本」に

欠けている。そして彼は、これらを「比較的後世の付加」とするが、具体的なことは何も言っていない（五七―五八頁）。そこで、この部分について目に留ったことを次に述べておきたい。

一、本『集』の第二章は、第三四句以下に於て、『シヴァ・プラナ』を構成する七集の中で特に第二『ルドラ・集』と第六『カイラーサ・集』とが格段に優れた功徳を有しているとして、口を極めて賞賛し、第四七句では「他の諸『集』もあらゆる願望と果報を適えてくれるが、『ルドラ・集』と『カイラーサ・集』は〈遊戯〉と〈識知〉に満ちていて別格と知らるべきである。」と明示している。そこで右の両集を見ると、『ルドラ・集』では世界の創造等がシヴァ神の〈遊戯〉であることを説き⁽¹⁰⁾、『カイラーサ・集』では全編がシヴァ派の教説・諸原理の詳述に当てられ〈識知〉が重視されている⁽¹¹⁾。即ち前引の第四七句の記述によく合致するわけで、そのような両集がこの記述の前に存在していたことは間違いない。

では、この両集の年代は何時頃であろうか。先ず『ルドラ・集』について、ハズラは西暦十四世紀より前ではないと言う（六五頁）。

後に見るように、この場合もハズラの所論は説得力に欠けるが、様々の点から考えて彼が提示した年代は妥当なものと思われる。だとすれば、この『ルドラ・集』を知っていた『第一集』の現形成立は一四世紀以降となるであろう。また『カイラーサ・集』の年代については、それが九五〇年以前ではあり得ないということしか言えないと述べ、さらに十一世紀以後である可能性を示唆している（五九頁）。このハズラが示唆した可能性は、少なくとも「七集本」で見える限り、極めて

確度の高いものと言える。それどころか、十五世紀末以後の成立である可能性も存する（後述参照）。それ故、この点から見れば、『第一集』の上限は一五〇〇年前後となることも考えられる。

二、『第一集』第二章には〈現身解脱者〉について次のような叙述がある。

「この『シヴァ・プラナ』を、毎日、怠りなく、力の及ぶ限り、信愛をもって読誦する人、そのような人が現身解脱者と言われる。」
etac-chiva-purāṇaṁ hi yaj praty-aham atandritaḥ ||
yathā-śaktiḥ pāṇed bhaktiḥ sa jīvan-mukta ucyate || 21 ||
「この、七集から成る完全な『シヴァ・プラナ』を、尊崇の念をこめて読誦する人、そのような人が現身解脱者と言われる。」

etac-chiva-purāṇaṁ hi sapta-saṁhitāṁ ādarāt ||
paripūrṇaṁ pāṇed yas tu sa jīvan-mukta ucyate || 63 ||

この両句は、何れも先ず具体的内容を示した後、それを承けて「そのような人が現身解脱者と言われる。」と同一の形式で結んでいる。ここには、〈現身解脱者〉を定義する一定の型が既に存在していたことを予想せしめるものがある。そして事実、管見の範囲内だけでも、次の六書に右と同様な定義が纏って現れる。

一、『ヨーガ・ヴァーシシュタ』(Yoga-vāsishṭha) 三・九・四―三。ここには、内容こそ右の定義と異なるが形式は全く一致するものが一〇箇、一群となつて出てくる。また第五編・第十六章にも同形の定義が散在する（第十一、二〇、二二句）。本書の成立年代は西暦一〇〇―一二〇〇年頃と見られている⁽¹²⁾。

二、『ヴィヴェーカ・チューダーマニ』(Viśveśa-cūḍamaṇi) 四二八—四四〇⁽¹⁴⁾。ここには十三の定義が見られるが、形式は右のものとして少し相違し、細かく言えば三種の別がある⁽¹⁴⁾。この十三句の中、二句（四二九、四三〇）が内容上『ヨーガ・ヴァーシシュタ』三・九・七と三・九・十二とに相当する。本書はシャンカラ (Śaṅkara) に帰せられているが、恐らく後世の偽書で、その製作年代は右の第一書と次の第三書との間の時期であろう⁽¹⁵⁾。

三、『全ヴェーダーンタ定説の精髓・要集』(Sarva-vedānta-siddhānta-sāra-saṅgraha) 九六七—九七八。ここには十二の定義があるが、形式は『ヨーガ・ヴァーシシュタ』のものと全く一致し、その中の六句が同書からの引用である⁽¹⁶⁾。本書もシャンカラ作とされているが、実際には遙かに後のもので、その上限は『ヴェーダーンタ・サラー』(Vedānta-sāra) の年代、即ち十六世紀初頭と見ることができ、下限は多分、十七世紀中頃であろう⁽¹⁷⁾。

四、『マハー・ウパニシャッド』(Mahāopaniṣad) 二・四二—六二。ここに見られる二二句の定義の中、六句が『ヨーガ・ヴァーシシュタ』第三編・第九章と第五編・第一章に殆ど同じ形で出ている。本ウパニシャッドの成立については、『ヨーガ・ヴァーシシュタ』以後であるということ以外、確かなことは判らない⁽¹⁸⁾。

五、『アディヤートマ・ウパニシャッド』(Adhyātmaopaniṣad) 四四—四七。この四句は総べて『ヴィヴェーカ・チューダーマニ』からの引用である⁽¹⁹⁾。

六、『ヴァラーハ・ウパニシャッド』(Varhōpaniṣad) 四・二—三〇。この一〇句は、二六と二八の両句を除く八句が、『全ヴェーダー

ンタ定説の精髓・要集』九六七—九七四に相当する。その外にも両書には共通する句が見られるが、その前後関係については何とも言えない。

以上を通じて我々は、この形式による〈現身解脱者〉の定義が、『ヨーガ・ヴァーシシュタ』以来、多くの書物で用いられてきたことを知り得る。そこで、前引の『シヴァ・プラナー』の二句であるが、この二句が『ヨーガ・ヴァーシシュタ』よりも前に存在していたとは考えられない。理由は以下の二つである。(一)、〈現身解脱者〉とは最高の宗教的境地を指す言葉である。従って、その定義は特別な精神的境地を叙述しているものが本来的である筈で、右の各書の定義も大体そのようになってゐる。一例を挙げると、六書の中で四書に共通して見られる『ヨーガ・ヴァーシシュタ』三・九・七は、「目覚めていても熟睡状態にあつて、目覚めの状態にあることなく、その覚知に習気がない人、そのような人が〈現身解脱者〉と言われる。」と述べている。ところが『シヴァ・プラナー』の定義は、そのような解脱の境地を述べたものではなく、『シヴァ・プラナー』を誦する功德を讃えるために敢て内容的に調和しない此の定義を利用した形になっている。その意味で〈現身解脱者〉の定義としては非本来的である。すると、非本来的なものが本来的なものに先立って存在したと見るのは不自然であるから、『ヨーガ・ヴァーシシュタ』の定義の方が前にあつたとしなければならぬ。(二)、『シヴァ・プラナー』には此の形式の定義が二度ほどしか出てこないのに、『ヨーガ・ヴァーシシュタ』では疊みかけるように現れてきて、その与える印象が遙かに強烈である。このような場合、印象の強い方が先にあって他に影響を与えた、と見るべきであろう。こうしてみると、『シヴァ・プラナー』第一集

の成立は十二世紀以降ということになる。尤も『ヨーガ・ヴァーシシュタ』の年代も未だ確定的とは言えないから、そこに多少の幅を認めなければならぬであろう。

ところで、いま述べたように『シヴァ・プラーナ』の定義は、内容上〈現身解脱考〉の定義としては非本来的なものであった。そこで考えられるのは、本書が内容的に必ずしも適切と言えない此の定義を取て用いたのは、この種の定義が屢々用いられ既に一般に極めて受入れられ易いものになっていたからだ、ということである。では、この定義がそのような定着を見るに至ったのは何時頃であろうか。勿論それをはっきりと見定めることは困難である。それに、前記の『ヴィヴェーカ・チューダーマニ』とニウパニシャッドは成立年代が不明確なこともあって、この問題を考えるのに余り役に立たない。然し、『ヨーガ・ヴァーシシュタ』以来、相当の時間的経過があったことは容易に想像される。それと、本『第一集』が頻りにヴェーダやヴェーダーンタとの親縁関係を力説している事実を考え合わせると⁽²⁰⁾、右の問題の時期は、ヴェーダーンタの巨匠ヴィディヤラヌヤ(Vidyaranya)が出現した十四世紀後半から名著『ヴェーダーンタ・サーラ』が書かれて大きな影響力を行使した十六世紀頃までと想定してよいであろう。

三、この『第一集』には、筆者が気付いた限り、「ヴェーダーンタの精髓を総べて自分のものとしている。」(vedānta-sāra-sarvasya)という言葉が二度、「プラーナ」に対する修飾語として出てくる⁽²¹⁾。この言葉は『第一集』以外にも散見するが⁽²²⁾、これらの言葉を見て我々が直ちに想起するのは前記の『ヴェーダーンタ・サーラ』であり、また『全ヴェーダーンタ定説の精髓・要集』である。勿論、これらの言

葉が『シヴァ・プラーナ』以前に『ヴェーダーンタ・サーラ』等が存在したことを意味するものかどうか、遽かには決定し難い。しかし上述のように、『第一集』の成立が十四世紀から十六世紀にまで降る可能性も充分に認められること、『ヴェーダーンタ・サーラ』が広く読まれた有力な書物であったこと、等を考えると、右の言葉は『シヴァ・プラーナ』の著者(または編者)が、〈その『ヴェーダーンタ・サーラ』の内容も総べて我が『シヴァ・プラーナ』の中に取り込まれている〉として自らを誇示したもの、と受け取れないこともないのである。さて、以上のことから次のように言えるであろう。

一、『第一集』の現形成立は、『ヨーガ・ヴァーシシュタ』や『カライラサ・集』との関係から考えて、確実に十一世紀中葉より後であろう。

二、しかし『ルドラ・集』との関係等から見れば、十四世紀以降の成立としても差し支えない。

三、本〈集〉の現形が十六世紀以後に成立した可能性も充分にあり得る。

二 第二『ルドラ・集』

(Rudra-saṃhitā)

本〈集〉は「七集本」にしかない。この〈集〉をハズラは十四世紀以後の成立と見た。その理由として彼は、『ルドラ・集』に次の諸書からの引用句が存することを挙げている(一八五頁)。

一、『知識・集』(Jñāna-saṃhitā)

二、『法・集』(Dharma-saṃhitā)

- 三、『ラグフ・ヴァンシャ』(Laghu-varṇa)
- 四、『クマール・サンバハヴァ』(Kumāra-sambhava)
- 五、『パンチャ・タントラ』(Pāṇca-tantra)
- 六、『パドマ・プラーナ』(Padma-purāṇa)
- 七、『リンガ・プラーナ』(Linga-purāṇa)
- 八、『ブラフマ・ヴァイヴァルタ・プラーナ』(Brahma-vaiṣṇava-purāṇa)
- 九、『カーリカー・プラーナ』(Kālika-purāṇa)

この中、一と二は『シヴァ・プラーナ』の「六集本」にのみ存する『集』で、ハズラは前者を西暦九五〇年以降、後者を同じく九〇〇年以降の成立としている（五六頁及び六四頁）。その下限については何も言わない。従って、この両集が『第二集』に援引されているとしても、そのことが『第二集』の上限を十四世紀まで引き下げる論拠になり得ないことは明白である。

次に、三の『ラグフ・ヴァンシャ』と四の『クマール・サンバハヴァ』は、言う迄もなく詩聖カーリダーサ (Kālidāsa) の作品である。彼の年代は、学者により少しの違いはあるが、だいたい西暦四世紀から五世紀にかけての頃と見ればよく、これに大きく違背することは考えられない⁽²⁴⁾。だから、この場合も、『ルドラ・集』を十四世紀以後に置く必然性は認められない。

次に、第五の『パンチャ・タントラ』は、その原型が西暦二世紀頃に成立して以来、多くの異本が複雑な過程を経つつ流布伝播してきたもので、年代決定の基準には向かない書である。しかし敢て言えば、

一般に行われている『小本』が九〇〇―一〇〇年頃、そして『広本』が一九九年の成立とされているから⁽²⁴⁾、何れにせよ、本書からの引用を根拠に『ルドラ・集』の年代を十四世紀以降に求めることは適切と言えない。

最後に六から九にかけての四書であるが、これらは何れも「プラーナ」である。そこで、これら諸プラーナの年代をハズラの所論を中心に見てゆこう。先ず『パドマ・プラーナ』について、彼は現行の出版本を篇や章に従って幾つかのグループに細分し、各グループごとの年代推定を試みているが、その総てを通じて最も降る年代が一五〇〇年であり、大部分は一四〇〇年以前に置かれている⁽²⁵⁾。しかしローチャーは、その『プラーナ』の中で、このハズラの見解を完全に無視して紹介すら行っていない。そこには、このハズラの所論に対するローチャーの疑念を読み取ることができる。次の『リンガ・プラーナ』は、ハズラによると、大部分が西暦六〇〇年もしくは八〇〇年から一〇〇〇年にかけての成立である⁽²⁶⁾。次の『ブラフマ・ヴァイヴァルタ・プラーナ』の年代についてハズラは、その中の第四編・第八章と同・第二十六章のみが西暦八世紀から十四世紀初め迄の間の成立で、他の全編は一〇一十六世紀の成立だと考えている⁽²⁷⁾。そして最後の『カーリカー・プラーナ』は、ハズラの見るところ西暦一〇世紀から十一世紀前半の間の成立である⁽²⁸⁾。ローチャーは、このハズラの所見を容認しているかのような書き方をしているが、明確な賛否を表明しているわけではない⁽²⁹⁾。

以上を見て明らかのように、これら諸プラーナが『シヴァ・プラー

ナ』第二集に引用されているとしても、必ずしも『第二集』の成立が十四世紀以降であるということにはならない。先ず、ハズラの年代論そのものが未だ多くの問題を含んでいる上に、たとえ彼の所論をそのまま認めたとしても、それに従えば『第二集』の成立が十六世紀以降である可能性も残っているからである。なおハズラは、前記の諸ブラーナと『第二集』とに共通する詩句が見られる場合、すべてを一方的に『ルドラ・集』が借用したものと見ているが、貸借関係が逆の場合もあり得よう。ハズラの所論は、その点を一々明確にしていない以上、充分な説得力を持つとは言い難いのである。ローチャーも、この『第二集』を巡るハズラの年代論については沈黙している。

これらの事情は別として、我々が注意したいのは、『ルドラ・集』の現形が成立した頃、インドに於て仏教が既に消滅し、その記憶すら失われかけていたように見えることである。その理由を次に述べよう。『ルドラ・集』第五編の中に、「三つの城市」を支配する三人の阿修羅をヴェーダの正法から逸脱させるため、ヴィシシュヌが自分自身の中から剃髪者アリハン(Arihan)を造り出し、阿修羅どもに偽のヴェーダの教法を説かせる話が出てくる。そこで、ヴィシシュヌの命を受けたアリハン⁽³⁰⁾は、更に自分と同じ姿の四人の弟子を造り出し、ナーラダ仙の助力を得て、トリプラの住民にヴェーダの真説だと偽って異教の法を説くのである。その際に説かれた異教の法が、実は「仏教の聖典に説かれた法」(Buddhagama-vinirdisjan dhaman. pl. acc.)なのであった⁽³¹⁾。ところが、その四人の弟子達は、呼吸中に極く微小な生物を飲み込んだり歩行中に生き物を踏み殺したりすることがないように、口には布切れを当て、歩く時には箒を携帯したとされている(二・五・

四・二八―三〇)。ところが周知のように、このような生活態度はジャイナ教徒のものである。即ち、ここでは仏教が同じ異教の代表的存在であるジャイナ教と混同され、仏教はジャイナ教の中に溶解してしまっているのである。

また、二・五・一六・一以下で梵天を始めとする神々がヴィシシュヌ神に呼びかける一連の言葉の中に、次の二つの語句が並んで現れる。即ち「仏教徒の姿をしたジナの徒」と「カルキの姿をした、蛮族の退治者」とである。これらの言葉の背後には、明らかに「ヴィシシュヌの十権化」の観念がある。しかし、ここで「仏教徒」は「姿」とともに、「ジナの徒」を修飾する形容詞の位置に後退し、代って「ジナの徒」が主体となって前面に出ている⁽³¹⁾。つまり、ここで仏陀は「十権化」中にしめていた座を放棄し、仏教はジャイナ教に融消して独立の存在を失いかけていたのである⁽³²⁾。

こうしてみると、『第二集』の作者(または編者)の脳裏に於て、仏教は如何に影が薄く、その実態が忘れ去られようとしているか、が察知されるであろう。

さて、このように仏教の存在が殆ど忘れられていることは、『第二集』の成立がインドに於ける仏教滅亡の時から相当の長期間を経た後であったことを推測せしめる。普通、インドに於ける仏教の消滅は、一二〇三年、回教徒がヴィクラマシラー寺を壊滅させた時とされているが、その後も仏教は、ある程度の期間、何らかの形で残存したであろう⁽³³⁾。爾来、インドに於て仏教が殆ど忘却される途になるのが、同寺の壊滅から僅々二〇年か三〇年のことであつたとは、とても考えられない。従って、現『ルドラ・集』の成立は早くても一二〇〇年前後、

換言すれば十四世紀以降と見てよいであろう。

次に、もう一つ気付いたことを書き留めておきたい。

本書二・五・二・三四―五五に於て、神々は以下のような多くの譬えを用いてシヴァ神を讃えている。

「貴方は神々の中ではインドラ、諸星の中では太陽、諸世界の中では真実界、河川の中ではガンジス (dyusariti)、色の中では白色、湖の中ではマーナサ湖、山々のなかでは山王、牛の中では如意牛、海の中では乳海、金属の中では黄金、四姓の中では婆羅門、人々の中では王、解脱地 (mukti-ksetra) のではカーシー、聖地の中では聖地の王、石の中では水晶、花の中では蓮華、山々の中ではヒマラヤ、諸活動の中では語、詩人の中ではバールガヴァ、鳥の中ではシラバハ鳥、猛獣の中では獅子、石の中ではシャーラグラマ石、…… (中略) ……、祭儀の中では馬祠祭、…… (中略) ……、草の中ではクシャ草、大樹の中ではバンヤン樹、…… (中略) ……、清浄な修法の中では制息法、光明リングの中では全宇宙の主神 (Viśveśvara)⁽³⁴⁾、親しいものの中では法、四住期の中では最後 (の遊行期)、…… (中略) ……、そして悪鬼の中ではバリ (Bali) であります。」

ところで、これと同じ発想が『クラールナヴァ・タントラ』(Kṛāṇā-tantra) 三・二―二五に見られる。それは次のようなものである。

「神々の中でのヴィシュヌの如く、諸星の中での太陽の如く、聖地の中でのカーシーの如く、河川の中でのガンジス (svar-nadi) の如く、山々の中でのメールの如く、樹木の中での梅檀の如く、祭儀

の中での馬祠祭の如く、石の中での宝珠の如く、味の中での甘味の如く、金属の中での黄金の如く、獣類の中での牡牛の如く、鳥類の中での白鳥の如く、四住期の中での乞食者の如く、四姓の中での婆羅門の如く、人間の中での王の如く、肢体の中での頭部の如く、香料の中での麝香の如く、城市の中でのカーンチー城市の如く、かくの如く (上方伝承) (urdhvaṁnaya) は総べての法の中で最勝である。⁽³⁵⁾」

この二つの叙述を比較すると、『シヴァ・プラーナ』の方は遙かに拡大されており、両者が完全に一致するわけではない。けれども、此処に見られる親近関係は、一方が他方を知っていたことを明らかに物語っている。ただ、影響を与えた書物が二者の中の何れであるかは判断し難い。しかし『第三集』にも両書に共通する句が存し、その場合は『シヴァ・プラーナ』の方が借り手と考えられる (後述参照)。従って、今の場合も事情は同じで『第二集』の方が借用者である、と見てよいであろう。

ところで、『クラールナヴァ・タントラ』も年代決定が難しい書物であるが、専門家によって西暦一〇〇〇―一四〇〇年の成立という見解が提示されている⁽³⁶⁾。この見解は、(一)、先に我々が『第二集』を十四世紀以降の成立と予想したこと、(二)、そして今『第二集』は『クラールナヴァ・タントラ』以後の成立であると推定したこと、と矛盾しない。

三 『第三』『百ドラ・集』

(*Sata-rudra-saṁhitā*)

この〈集〉も「六集本」には存在しない。ハズラは、この『第三集』が次の諸書に言及しているとの理由で、その成立を西暦一四世紀以降とした(六五頁)。

一、『知識・集』

二、『クマール・サンバハヴァ』

三、『リンガ・プラーナ』

四、『ヴァーヤヴィーヤ・集』

五、『ルドラ・集』の「サティール編」

さて、右の中、第一―三の三書については前節で述べたが、これら三書と十四世紀以降との間には何の必然的関連も存在しない。

次に、四の『ヴァーヤヴィーヤ・集』とは『シヴァ・プラーナ』第七集のことである。ハズラは、この『第七集』を『第三集』が利用していると言うが、引用関係は逆であるかも知れない。特に『第七集』には「百ルドラ・集」という名前が出てくるから⁽³⁷⁾、『第七集』が『第三集』を予想していると見るのが普通であろう。同じことが第五の「サティール編」についても言える。既に指摘したように⁽³⁸⁾、第二の「ルドラ・集」に出てくる〈光明リンガ〉への言及は、『第三集』と『第四集』の所論を承けているように見える。だから、『第三集』の方が『第一集』より前にあった可能性が強いのである。

このように、ハズラの十四世紀以降・説には説得力が乏しい。しかし同時に、これを積極的に否定する材料も見当らない。強いて言えば、

前述のように、『第三集』は『第一集』の前に成立していた可能性が強い。そして、『第三集』の現形成立は他の諸集とあまり隔たらない時期のことであつただろう。このように考えると、その時期は、十三世紀末もしくは十四世紀より後ということになる。この想定はまた、次に述べることも抵触しない。

本書の三・一二・三に左の一句がある。

「恰も水が水に、牛乳が牛乳に、乳酪が乳酪に投入されたように、
そのように⁽³⁹⁾、ヴィシュヌはシヴァに融没して一つになる。外^{ほか}に有り様はない。」

yathā jale jalam kṣiptam kṣīre kṣīram ghrīte ghrītam,
eka eva tadā viṣṇuḥ śive īno na cānyathā.

この句は『クラールナヴァ・タントラ』九・一五の次に句を借用したものである。

「恰も水が水に、牛乳が牛乳に、乳酪が乳酪に投入されたように、
そのように、命我と最高我との間に区別はなくなるであろう。」

yathā jalam jale kṣiptam kṣīre kṣīram ghrīte ghrītam,
a-viśgo bhavet tad-vaḥ jivāma-paramātmānaḥ.

この句の借用者が『シヴァ・プラーナ』の方であることは、その現れ方の唐突さから判断できる。この第三集・第二章の主題は、シヴァがヴィシュヌの化身である人獅子^{ナシン}を打ち倒し、その皮を眷族のヴィーラバハドラに剥がしめて自ら身に纏ったという凄惨な物語である。ところが、その途中に突如として右の句が現れ、シヴァとヴィシュヌの根元的同一性を説くのである。だから、この部分は主題の文脈に馴染

まず、問題の句にしても、作者の思い付きで此処に利用されたとの感じを否むことができない。

これに対して『クラールナヴァ・タントラ』第九章は、ヨーガ、即ち、命我と最高我（『シヴァ神』）との冥合を主題とし、前引の句はそのような『三昧』の境地を比喻によって説明する六句の最初に出てくる。従って、この句は本章の文脈に溶けこんでいて全く違和感を抱かせない。また、『パインガラ・ウパニシャッド』（Paingalopanisad）四・一〇が、この一句を『クラールナヴァ・タントラ』と全く同じ形で引用している⁴⁹。これらのことから、借り手が『シヴァ・プラナー』の方であることは先ず間違いない。

では、『百ドル・集』は『クラールナヴァ・タントラ』と『パインガラ・ウパニシャッド』の何れから右の句を引用したのであろうか。多分それは前者からである。理由としては、（一）、上述のように、『クラールナヴァ・タントラ』が権証として『ウパニシャッド』に引かれる程の影響力を持っていたこと、（二）、前引『百ドル・集』三・一二・三二に見える「シヴァに融没して」（sive lino）という言葉は、同じく前引『クラールナヴァ・タントラ』九・一五の直前に「本性がシヴァに融溶して」（sive vilināta）とあるのを承けていると思われること、（三）、『第二集』にも『クラールナヴァ・タントラ』の影響と見られる文言があったこと、等である。すると、同タントラの成立年代などから考えて、『第三集』を二三世紀末もしくは一四世紀以降に置いても差し支えはない。

四 第四『千万ドル・集』

(Koti-rudra-samhitā)

この〈集〉も「七集本」にしかない。その成立年代についてハズラは、「主に『知識・集』から採られた諸章から成り、一度『百ドル・集』に言及しているから、十四世紀以前ではあり得ない。」と述べるだけで、特に新しい材料は提示していない（六五頁）。

思うに、『第四集』は『第三集』の叙述を承けて、そのまま書き続けられたものであろう。何故なら、『第三集』は十二の〈光明リング〉を紹介する第四章で終り、『第四集』はその〈光明リング〉の称賛をもって始まる。そして更に第十四・三三の各章に於て、十二リングの一々について因縁や功德等を詳述しているからである。だとすれば、この『第四集』は『第三集』とほぼ同時の成立であらう。従って、十三世紀末もしくは十四世紀より後ということになる。

五 第五『ウマー・集』

(Umd-samhitā)

この〈集〉も「七集本」にだけある。ハズラによれば『第五集』は、（一）、『第四集』に言及し、（二）、大部分の章の句が『法・集』から採られ、（三）、第四章の幾つかの句は『デーヴィー・バーハガヴァタ・プラナー』（Devī-bhagavata-purāṇa）とベンガル稿本『シヴァ・プラナー』後篇に由来しているように見える、という（六五頁）。しかし、年代については「明らかに後世の作品」（evidently a later work）とするだけで、具体的な数字は示さない。ところで、右の三

項の中、新しい材料は(三)だけであり、その中『デーヴィー・バハーガヴァタ』はハズラに従えば十一世紀か十二世紀の作品である⁽⁴¹⁾。また、本プラーナのベンガル稿本とはベンガルに伝わる一異本で、前後の二編から成り、特に後編が独自の内容を含んでいて十二世紀の作品であるという(六七頁)。もし、以上の彼の所論が総べて正しければ、『第五集』の成立は十四世紀以降となるであろう。

我々としては特に論評すべき材料を持たない。ただ気付いたことを一つ述べておこう。『第五集』では「人身が得難い」ことを強調している(五・二〇・二八―三三、五・四四・一三)。この観念は、他の〈集〉にも現れるが『第五集』では意識的な強調の度が強いように思われる⁽⁴²⁾。ところで、この観念は先に見た諸書の中、『クラールナヴァ・タントラ』一・一三―一六、『ヴィヴェーカ・チューダーマニ』五、『全ヴェーダーンタ定説の真髄・要集』二三八等にも出てくる。即ち『第五集』も、これらの著作と共通する雰囲気に分け合っているのである。

六 第六『カイラーサ・集』

(*Kailasa-saṃhitā*)

本〈集〉は「六集本」では第三集に当る。ハズラによると、両テキストの間に実質的な相違はなく、その成立は九五〇年以降である。理由としては、(一)、本書がツラシー樹に言及していること、(二)、『サナトクマール・集』(*Sanatkumāra-saṃhitā*)の内容に触れていること⁽⁴³⁾、(三)、シャンカラの影響を示していること⁽⁴⁴⁾、(四)、『シヴァ・

スートラ』(*Śiva-sūtra*)から最初の二經⁽⁴⁵⁾を引いていること、を挙げている。その上で彼は、もし第六章の六、七の両句が『第七集』第一章の一〇―一から採られたものであり、引用された『シヴァ・スートラ』の二經に対する『カイラーサ・集』の説明が『シヴァ・スートラ・ヴィマルシニー』か『シヴァ・スートラ・ヴァールッティカ』に基づくものであるならば、本〈集〉の年代は十一世紀以降になるという。この中『第七集』との関係については引用関係が逆である可能性も強いが、『シヴァ・スートラ』に対する『第六集』の説明の方は、確かに『シヴァ・スートラ・ヴィマルシニー』に基づいていると思われる。まず問題の二經は、本〈集〉の第十六章に次のような形で引用されている。

「慧知」という言葉は「精神」と同義語である。疑念があつてはならない。

「精神が自我である」という『シヴァの經文』が存在している。牟尼よ。(四四)

「精神」とは全宇の(本体)であり、一切の知と行を本性としている。

独立してあること、それを本質としているものが自我と言われるのである。(四五)

以上を始めとする、『シヴァの諸經文』に対する註解が私によって説かれた。

「知は束縛である」というのが、主宰神の第二の經文である。(四六)」

prajñānaśabdaiś caityanya-paryāyas syān na saṃśayaḥ |

caityanyam ātmēti mune śiva-sūtram pravartitam ॥ 44 ॥
caityanyam iti viśvasya sarva-jñāna-kriyātmakam ॥
svātantryam tat-svabhāvo yah sa ātmā parikṛtitah ॥ 45 ॥
ity ādi śiva-sūtrāṇaṁ vārtikaṁ kathitaṁ mayā ॥
jñānaṁ bandham itīdan tu dvitīyam sūtram iṣitūḥ ॥ 46 ॥

問題は「精神が自我である。」という第一経である。今、右の註解に随いながら言葉を補って言うところ、この経で「自我」は二つの意味を持っている。一つは「最高我」の意味で、この場合は最高神シヴァと同義である。従って、この経文はシヴァが精神そのものであることを表している。第二は「本性」、^{（45）}「本質」、^{（46）}「本体」等の意味で、この場合の経文は、精神そのものであるシヴァ神が同時に全宇（Viśva）の本体であることを説示している。結局、「全宇の本体であるシヴァは全知・全能を本性とする独立の精神的存在である」というのが第一経の趣意である。

ところで、このような内容は、僅か二語から成る経それ自体から直接出てくるものではない。当然、註釈書の解釈に基く説明である。では、『シヴァ・プラーナ』の右の説明は如何なる註釈書に基いていたのであろうか。

現在、我々が所有する検討すべき註釈書は次の四本である^{（47）}。

- 一、『シヴァ・スートラ・ヴリッティ』（Śiva-sūtra-vṛtti）。作者不詳^{（48）}。以下『第一註釈』と略記。
- 二、『シヴァ・スートラ・ヴィマルシニー』（Śiva-sūtra-vimarśinī）。

作者は一〇二〇—一〇五〇年頃に著作活動を行ったクシェーマラージャ（Kṣemarāja）^{（49）}。以下『第二註釈』と略記。

三、『シヴァ・スートラ・ヴァールッティカ』（Śiva-sūtra-vārttika）。作者は十一世紀の人バハースカラ（Bhāskara）^{（50）}。『第三註釈』と略記。

四、『シヴァ・スートラ・ヴァールッティカ』（Śiva-sūtra-vārttika）。

作者は十五世紀末のヴァラダラージャ（Varadarāja）^{（51）}。『第四註釈』と略記。

まず右の四書の中、特に後世の書と見られる『第四註釈』以外の三書について、前引の説明部に出てくる基本的術語がどのようになっているかを調べてみよう。

- (1) Viśva 『第二註釈』にしか出づらない。他の二書では「世界」（jagat）が用いられている。
- (2) sarva-jñāna-kriyātmaka. これと酷似の二つの言葉、即ち sarva-jñāna-kriyā-svatanttra ṇ sarva-jñāna-kriyā-saṁbandha-maya ṇ が『第一註釈』と『第二註釈』に一度づつ出づる。『第三註釈』には語頭の sarva を欠いた jñāna-kriyātmaka という形が一度現れる。
- (3) svātantrya. 『第一註釈』に一度、『第二註釈』に二度現れる。外に、この両註釈書には、svatanttra が複合語の一文として一度づつ出づる（前項の参照）。『第三註釈』には無い。
- (4) svabhāva. 『第一註釈』に一度出づる。『第二註釈』では四度、外に svabhāva-bheda という複合語で一度、合わせて五回出づる。この語も『第三註釈』には見えない。

以上を通覧すると、前引の説明部と最も直接的で密接な関係にあるのは『第二註釈』であることが判る。だから、本プラーナの説明は主としてクシェーマラージャの『第二註釈』に拠ったものだとと言える。この点からみると、『第六集』の上限は十一世紀の中葉となるであろう。

ここで、前引の第四六句の前半に注目したい。ここでは、第一經の説明がなされただけに「シヴァの諸經文(複数)の註解が私によって説かれた。」と述べている。次の第二經のことが考えられているとしても不自然で、前後の脈略にうまく適合しない。ところで、この不自然さの由因は、前記の説明部分がクシェーマラージャの註解を承けたものであったことを念頭に置きながら『第四註釈』の次の句を読むとき、自ら明らかとなる。

「大自在天派の大聖クシェーマラージャの口から発せられた正しい註釈書に倣い、まさに彼が述べた文言を用いて、直ちに、シヴァの諸經文の註解が私によって為されるのである。」(傍線筆者)

māha-māheśvara-srīmat-kṣemarāja-mukhōdgaṭām
anusūtyaiva sad-vṛttim añjāsā kṛiyate mayā || 5 ||
vārtikam śiva-sūtrāṇam vākyair eva tad-īrtitaiḥ |

即ち、『第六集』の作者は、クシェーマラージャの言葉に従って論述を進めながら、『第四註釈』の右の句を想起して、その一部を自著の中に取り込んだのであろう。その結果、上記のような不自然さが生じたものと推測される。

もし、右の想定が当てっており、かつ『第四註釈』の著者ヴァラダラージャが果して十五世紀末の人であるならば、『第六集』の成立は十五

世紀末を更に降ることになる。

七 第七『ヴァーヤヴィーヤ・集』

(Vāyavya-saṃhitā)

最後の『第七集』は「六集本」でもその最後に位置している。ハズラによると、両者の間に識別し得るほどの相違はなく、成立は西暦八〇〇—一〇〇〇年の間である(ハ二一六三頁)。その中、彼が本『集』を八〇〇年以前ではないとする論拠については、改めて穿鑿しないことにする⁽⁴⁹⁾。何故なら、我々が考える『第七集』の上限は十三世紀で、この年代はハズラが言う八〇〇年以降の範囲内に入るからである。そこで問題は、彼が本書の下限を一〇〇〇とする点であるが、その論拠として彼は、次の三書に本『集』からの援引が見られることを挙げている。

一、『チャトルヴァルガ・チンターマニ』(Caturvarga-cintāmaṇi)。
クーマードリ (Hemādri) 著

二、『パラシーヤラ古伝書・解明』(Parāśara-smṛti-uyāhṛya)°。デー
ダハヴァ (Mādhava) 著

三、『ニトヤーチャラ・プラディープ』(Nityācāra-pradīpa)°。ナ
ラシンハ・ヴァーシヤペーイン (Narasimha-vājaṇeyin) 著

けれども、この三書の中、第一の書の作者ヘーマードリは十三世紀後半から十四世紀にかけての人である⁽⁵⁰⁾。次に第二の書の作者マードハヴァは十四世紀中葉に活動した学匠である⁽⁵¹⁾。ただ第三書の著者のみ如何なる人物であるのか詳かでない。ハズラ自身これら三者の年代

について何も言っておらず、その点でも彼の論証は甚だ不備である。こうして、少し問題を残しはするが、前二者との関係から見る限り『第七集』の下限は十三世紀まで下げることができるであろう。

さらに、ハズラの言う貸借関係は逆の場合もあり得ようから、もしそうだとすれば、『第七集』の成立は十四世紀中葉以降となるわけ、この可能性も無視できないのである。⁽⁵⁴⁾

ところで、我々が本〈集〉を十三世紀以降と見る手がかりは『ゴークシャ・シャタカ』(Gorakṣa-śataka) に見える次の諸句である。⁽⁵⁵⁾

praṇo'panaḥ samānaś cōḍāna-vyānau ca vāyavaḥ,

nāgaḥ kūrmo'ṭha kṛkaro devadatto dhananīyayaḥ. (33)

udgāre nāgāhvyātaḥ kūrma ūmīlane smṛitaḥ,

kṛkaraḥ kṣutakiḥ jñeyo devadatto vijimbhane. (36)

na jahāti mṛtam cāpi sarva-vyāpi dhananīyayaḥ. (37 a)

これは、本〈集〉の後編・三七章に殆ど同形で次のように出てくる。

praṇo'panaḥ samānaś ca hy udāno vyāna eva ca, (35 b)

nāgaḥ kūrmaś ca kṛkaro devadatto dhananīyayaḥ. (36 a)

udgāre nāga āhvyātaḥ kūrma unmīlane sthitaḥ,

kṛkaraḥ kṣavathau jñeyo devadatto vijimbhane. (39)

na jahāti mṛtam cāpi sarva-vyāpi dhananīyayaḥ. (40 a)

両書は、これらの句の前後および中間の部分では相違したものになっている。しかし、右に見る文言の一致は偶然と考えられず、両者の間に貸借関係があったことを歴然と示している。そして借用したのが

『シヴァ・プラーナ』であることも間違いない。何故なら、この『ゴークシャ・シャタカ』三六は直前の三五とともに、『ウェーダーンタ・サーラ』の註釈書『スポーディニー』に *lathā cōkṭam* という「論書」引用の形で引かれているからである。⁽⁵⁴⁾ 即ち、『スポーディニー』の著者は、これらの句を「プラーナ」のものとはしていないのである。だから、前引句の始源が『ゴークシャ・シャタカ』にあることは動かし難いであろう。

さて、このようにして『第七集』に『ゴークシャ・シャタカ』からの引用が認められ、また後者が一二〇〇年前後の著作であるとすれば⁽⁵⁵⁾、『第七集』の上限は十三世紀となる。

ここで、『第七集』とマータハヴァ等との関係が改めて問題となろう。いま述べたように、『第七集』の上限が十三世紀まで引き下げられるとすると、ハズラの見方が逆である可能性は一層強まってくるように感ぜられる。そして、それを示唆する事情も認められるのであった⁽⁵⁶⁾。それで、我々としては『第七集』の現形成立を十四世紀中葉以後と見たいのである。

結 語

以上、七集本・『シヴァ・プラーナ』の年代について、ハズラの所論を追いつながら各集ごとに見てきた。その結果、各集とも現形成立が十四世紀以降である可能性を指示していた。そして中には、第一、第六の両集のように、十六世紀以後の成立を暗示する〈集〉もあった。恐らく、全体としての最終的な現形成立は十六世紀前後であろう。

- (1) Haraprasad Shastri "The Maha-puranas", *Journal of the Bihar and Orissa Research Society*, No. XIV, Pt. III, 1928, p. 324.
 - (2) 既に幾つかのプラーナ自身が一八の「大プラーナ」を列挙している。それらは多少の例外を除いて一致しているが、最大の問題の一つは、あるリストで『ヴァーユ・プラーナ』(Vāyu-or Vayavya-purāṇa) とあるところから他のリストで『シヴァ・プラーナ』(Śiva-or Śaiva-purāṇa) となっているところがある。この点については註(4)から註(6)に挙げた諸書で触れられている。
 - (3) R. C. Hazra, "The Upapurāṇas", *Annals of the Bhandarkar Oriental Research Institute*, No. 21, 1939, pp. 38-62.
この論文は、一八の「副プラーナ」のリスト一八種とその典拠を詳しく紹介している。それによると、「大プラーナ」と違って「副プラーナ」の場合は、リストによって内容の相違が著しく、中には「大プラーナ」とされるものを含むリストさえ見受けられる。
 - (4) M. Winternitz, *Geschichte der indischen Literatur*, Bd. I, Leipzig: C. E. Amelangs Verlag, 1905, S. 465, Anm. 1, 11, Renou et J. Filliozat, *L'Inde classique*, tome I, Paris: Payot, 1947, § 835; R. C. Hazra, *Studies in the Purāṇic Records on Hindu Rites and Customs*, Delhi: Motilal Banarsidass, 1975 (1st edition: Dacca, 1940), pp. 13-15, 井原徹山『印度教』(大東出版社、昭和一八年)一六三頁。
- ヴァインテルニッツは、「一八の大プラーナ」のリストに出てくる『シヴァ・プラーナ』は『ヴァーユ・プラーナ』の別名であり現行の『シヴァ・プラーナ』

ナ』のことではないとして、現行の『シヴァ・プラーナ』を「大プラーナ」から除外し「副プラーナ」に位置付けている。このヴァインテルニッツ『インド文献史』第一巻は、一九二七年、ケトカル(S. Ketkar)による加筆・英訳が原著者の校閲を経て出版され、さらに一九八一年、このケトカル訳に基づくシャルマ(V. S. Sarma)の英訳が現れた。しかし、最新のシャルマ訳でも、『シヴァ・プラーナ』を「副プラーナ」とするヴァインテルニッツの見解は明瞭に保持されている。Cf. *History of Indian Literature*, Vol. I, A New Authoritative Translation from original German by V. Srinivasa Sarma, Delhi: Motilal Banarsidass, p. 528, note 3 and p. 555.

またハズラは、註(7)に挙げた論文でも、あらためて『シヴァ・プラーナ』が「副プラーナ」に属すること有力説している(四七五-五二頁)。

- (5) *The Śiva-purāṇa* (Ancient Indian Tradition & Mythology Series, vols. 1-4), 4 Vols, Delhi: Motilal Banarsidass, 1970.
本プラーナにも「一八プラーナ」のリストが二度ほど出てくる(五・四四・二〇一-二二七・一・一・四三-四五)。勿論、ここでは『ヴァーユ・プラーナ』を除き『シヴァ・プラーナ』を算入している。また、右の英訳者シャストリ(J. L. Shastri)は第一巻の序論の中で、『ヴァーユ・プラーナ』にも『シヴァ・プラーナ』にも現行のテキスト以前の「原プラーナ」が存在したと仮定し、それらの間に何等かの同一性があつたと考えることで問題を解決しようとしている(Introduction, p. xiii)。しかし、その論理は不透明である。
- ところで、『古代インドの伝承と神話シリーズ』は、現行の『シヴァ・プラーナ』も『ヴァーユ・プラーナ』も共に「大プラーナ」に含めており、その結果、この叢書を含む「大プラーナ」は一九になっている。さらに、そこには幾つかの重要な「副プラーナ」も含まれる筈である。

なお我々が依拠する『シヴァ・プラーナ』の「七集本」は、第二集が五編、第七集が前・後の二編から成っている。本稿では、この第七集の前・後編も、それぞれ数字の一と二で示す。従って、一・一・一とあれば第一集・第一章・第一句、二・一・一・一とあれば第二集・第一編・第一章・第一句、七・一・一・一とあれば第七集・前編・第一章・第一句のことである。

- (6) L. Rocher, *The Purāṇas* (A History of Indian Literature, ed. by J. Gonda, Vol. II, Fasc. 3), Wiesbaden: Otto Harrassowitz, 1966, pp. 30-34, 222-228.

但し著者自身は「一八」の中に『シヴァ・プラーナ』と『ウァーヌ・プラーナ』の何れを含めるべきか、という問題にはあまり立ち入らず「一八」という数に特にこだわらない態度を示している。(三四頁)。

- (7) R. C. Hazra, "The Problems Relating to the Śiva-purāṇa", *Our Heritage* 1, 1953, pp. 46-68.

- (8) 以下の論述では『シヴァ・プラーナ』のテキストとして左記の書を用いる。

The Śiva Mahāpurāṇa, with an introduction by Dr. Pushpendra Kumar (Purana Text Series 1), Delhi: Nag Publishers, 1981.

- (9) Th. Oberlies, "Die Śvetāśvatara-upaniṣad: Eine Studie ihrer Gotteslehre (Studien zu den "mittleren" Upaniṣads I)", *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens und Archiv für indische Philosophie*, Bd. XXXII, 1988, S. 56-60.

本ウパニシャッドについては『バハガヴァト・ギーター』(Bhagavad-gītā)に先行する作品で、西暦紀元前の成立と見るのが一般的傾向であるが、オーバーリースは右の論文の中で、両書の先後関係は逆であると論じ、『シヴァーターシヴァタラ・ウパニシャッド』の年代を

キリスト誕生から紀元後一世紀までの間としている。

なお、オーバーリースは、古代にシヴェーターシヴァタラ枝派が存在したかも知れないと想像しているが(三五-三六頁)、『シヴァ・プラーナ』六・一六・四八に「シヴェーターシヴァタラ枝派の人々」(Śvetāśvatara Śakhiṇah)という言葉が出てくる。但し、この語は『パンチャ・ダシー』(Pañca-dāśī)四・二にも見られるから、それに拠ったものかと思われる。それは兎も角、本プラーナには、外の《集》でも『シヴェーターシヴァタラ・ウパニシャッド』が幾度か引用されているので、目に留めたものだけ次に挙げておこう。括弧内の数字は引用された句の章・句を示す。VI. 13. 29 (IV. 10), VI. 13. 30 (1. 2), VI. 16. 48-49 (VI. 8), VII. 1. 3. 14 (VI. 14), VII. 1. 6. 17 (III. 4), VII. 1. 6. 33 (IV. 10),

ウパニシャッドの言及は、左記の書に収められたテキストに拠る。

One Hundred & Eight Upanishads, ed. by Vasudev Laxman, Śaṣṭī Pañṣīkar, 4th edition, Bombay: Nirṇaya Sāgar Press, 1932.

- (10) たとえば、二・一・六・一五、二・一・七・二二、二・四・一三・八、二・四・一五・二四等。

また、シヴァの様々な行動や、その神変力の発揮が《遊戲》であるとされている。二・二・一・九・一五、二・二・二・四・二六、二・二・二・四・四二、二・二・三・三六、二・三・四・二六、二・三・四・七六、二・三・四・九六、二・五・一六・一〇、二・五・三六・三六、二・五・四〇・六等。

- (11) 特に二・一・一・二・七五-七六に於て、《知》(jñāna)よりも《識知》(vijñāna)が上位に置かれてゐることに注意したい。

- (12) *The Yogavāsistha of Vālmīki With the Commentary Vāsistha-mahā-rāmāyaṇa-tātparyaprakāśa*, ed. by Vasudeva Laxmana

Sharma, Pansikar, Part I, Delhi: Motilal Banarsidass, 1984 (1st edition: Bombay, 1918), Introduction by G. V. Tagare, pp. vi-xi.

このタガレーの序論は、改版を重ねる中に付加されたものと思われる。かなり新しい文献も参照している。

- 03 *Viveka-cūḍāmaṇi* (Works of Shankaracharya in Original Sanskrit, Vol. IV, Minor Works, Poona, Ashtekhar & Co, 1925, pp. 219-271).

本書は、テキストにより語句や番号付けに多少の相違がある。たゞ左記の書では、問題の句は第四二七四四〇である。

Vivekachudamani of Shri Shankaracharya, Text with English Translation, Notes and Index, by Swami Madhavananda, Calcutta: Advaita Ashrama, 7th edition, 1966.

- 04 第一は「………が現身解脱者^ニ言^ハはる^ニ (ucyate)°」とある^ニを「………が現身解脱者^ニ言^ハはる^ニ (isyate)°」とある^ニの「第一は「………が現身解脱者の特相 (または定義) である (jivamuktasya lakṣaṇam)°」という形のもの、第三は「………が現身解脱者の特相をもちものである (jivamukta-lakṣaṇaḥ)°」というものである°。本書では『ヨーガ・シャシシュタ』より定義としての形式化が進んでいる、と見えるであろう。
- 05 ヴェーレンカタスビーアは、本書が可成り後世の『カイヴァルヤ・ウニシュヤム』(*Kaivalyopaniṣad*) に言及している^ニ、本書に出てくる jahat-lakṣaṇa v ajahal-lakṣaṇa が比較的後代になって問題とされるようになったものである^ニ、等を挙げて、『ヴィヴェーカ・チューダーマニ』はシャンカラ以後の著作であると主張している。さらに彼は、本書が『アディヤートマ・ウパニシュタッド』から多くの句を引用しているとして、本書の成立が新しいことを強調するが、この点については同意

できない(註9参照)。またインゴールズは、本書に見られる〈覚醒位〉と〈夢位〉との同一視や、*anirvacanīya* の意味の理解が、シャンカラの真作である他の著書と相違するとして、『ヴィヴェーカ・チューダーマニ』がシャンカラの作であることを否定する。ただ、ハッカーが本書をシャンカラの真作と見ている。彼はシャンカラに帰せられている作品の中、そのコロンベン・シャンカラを「尊者」(*bhagavat*) 等と呼んでいるものは真作「ハンナカニ図開業」(*Śaṅkarācārya*) と呼んでいるものは偽書であるとの基準を立て、この基準によつて『ヴィヴェーカ・チューダーマニ』を真作と考えるのである。これに対して前田専孝氏はインゴールズ説を採り、ボッターは「全く面白くない」(*interestingly enough*) という評語を付してハッカー説に言及している。次に述べることを合せ考えれば、本書がシャンカラ以後の作品であることは確かであろう。左に、ついで見た諸説の典拠を示す。

A. Venkatasubrah, "Are the Gauḍapāda-kārikās Śruti?", *Poona Orientalist*, vol. I, 1936, p. 12; Daniel H. H. Ingalls, "The Study of Śaṅkarācārya", *Annals of the Bhandarkar Oriental Research Institute*, vol. XXXIII, 1952, p. 7; P. Hacker, "Śaṅkarācārya and Śaṅkarabhagavatpāda", *New Indian Antiquary*, vol. IX, 1947, pp. 176-183; S. Mayeda, "Śaṅkarā's Upadēśasāhasrī: Its Present Form", *Journal of the Oriental Institute*, vol. XV, nos. 3-4, 1966, p. 252, n. 3; K. Potter, *Encyclopedia of Indian Philosophies*, Vol. III, *Advaita Vedānta up to Śaṅkara and his Pupils*, Delhi: Motilal Banarsidass, 1981, p. 335.

我々が本書を『ヨーガ・ヴァーシシュタ』以後と見るのは、(一) 前註で述べたように本書では定義の形式化が一層進んでいると思われるこ

と、(二)、次の註に示すように『全ヴェーダーンタ定説の真髄・要集』が本書を殆ど無視して『ヨーガ・ヴァーシシュタ』から問題の定義を採用したのは、『ヨーガ・ヴァーシシュタ』の文言に本源としての権証性を認めたからだと考えられること、による。

また本書が『全ヴェーダーンタ定説の真髄・要集』以前の成立であることは、両書の次の句を比較することによって知られる。

「アートマンの唯一性を覚知することがなければ、梵天の百年を経て(brahma-satantare)」、解説は成就しない。」「(ヴィヴェーカ・チューダーマニ』六)

「真理を証得することがなければ、梵天の百億年を経て(brahma-sahasra-koisu)」、解説は成就しない。」「(全ヴェーダーンタ定説の真髄・要集』三七三)

両句ともに真理の覚証が解脱のために肝要であることを強調しているが、もし前者が後者よりも後の句であるとする、ヴィヴェーカ・チューダーマニ』が後者の「梵天の百億年を経て」という表現をわざわざ「梵天の百年を経て」と言い変えて遙かに調子を落している点が不可解となる。しかも、両書には外にも共通する句が幾つか見られるから、何れかの一方が他方を知っていたことは確かだと思われる。だとすれば、明らかに『ヴィヴェーカ・チューダーマニ』の方が先にあったことになる。そこで、もし『全ヴェーダーンタ定説の真髄・要集』が十六・七世紀頃の作品だとすれば(註40参照)、『ヴィヴェーカ・チューダーマニ』の成立は十二世紀から十六世紀末までの間となる。今のところ、この間隔を縮める材料を持たない。なお註40参照。

(46) 本書九六七・九七二の六句が、それぞれ『ヨーガ・ヴァーシシュタ』第三編・第九章の第四・六・七・八・九・一三の各句に相当する。他方『ヴィヴェーカ・チューダーマニ』と共通する定義は、その第四三〇句に

相当する本書九六九の一句だけで、しかも、この句は『ヨーガ・ヴァーシシュタ』にも見られるものである。なお、本書のテキストには、註43で言及した『シャンカラ著作集』第四巻に所収(一三〇一二八頁)のものを用いた。

(47) 『全ヴェーダーンタ定説の真髄・要集』は、『ヴェーダーンタ・サラー』に比べて格段に詳細であるが、その骨子は『ヴェーダーンタ・サラー』に基いており、その内容を拡大・敷衍した形になっている。そして本書の第二句は『ヴェーダーンタ・サラー』の第一句をそのまま援用したものである。それゆえ、本書は『ヴェーダーンタ・サラー』以後の著作である。『ヴェーダーンタ・サラー』が他書を引用する場合は必ず引用であることを断っているのに、この第一句にはそれが無いから、右の貸借関係が逆であるとは思えない。

『ヴェーダーンタ・サラー』の年代については、大多数の学者が西暦一五世紀か一五〇〇年頃と見ている。しかし筆者には、ヒリヤナが主張する「十六世紀始め」(the early part of the 16th century)という説に傾聴すべきものがあるように思われる。彼が指摘するのは次の二つの事実、即ち、(一)、『ヴェーダーンタ・サラー』の注釈書『スポーディニー』(Sābodhinī)のコロフォンによれば、この注釈書は西暦一五八八年に書かれたものであること、(二)、『この『スポーディニー』の作者が『ヴェーダーンタ・サラー』の著者サダーナント(Sādananda)のことを parama-guru と呼んでおり、この言葉は「師匠の師匠」を意味すると考えられることである。このことから彼は前記の結論を引き出すのである。 Cf. *Vedānta-sāra. A Work on Vedānta Philosophy by Sādananda*, edited with Introduction, Translation and Explanatory Notes by M. Hiriyana, Poona: Oriental Book Agency, 1929, p. 17.

参考までに代表的な学者の説を挙げておきたい。括弧の中は、それらの著書を示す。『ヴェーダーンタ・サラー』の年代である。

J. N. Farquhar, *An Outline of the Religious Literature of India*, London: Oxford University Press, 1920, p. 286 (15th century); S. Radhakrishnan, *Indian Philosophy*, Vol. II, 2nd edition, 6th impression, 1951, p. 452 n. (15th century); J. Fr. Sprockhoff, *Saṃnyāsa; Quellenstudien zur Askese im Hinduismus I, Untersuchungen über die Saṃnyāsa-Upaniṣads*, Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes XL II, 1, Wiesbaden: Deutsche Morgenländische Gesellschaft, Kommissionsverlag Franz Steiner, 1976, S. 263 (um 1490); S. Dasgupta, *A History of Indian Philosophy*, Vol. II, Cambridge University Press, 1932, pp. 55, 216 (A. D. 1500); A. B. Kiehl, *A History of Sanskrit Literature*, London: Oxford University Press, 1920, p. 478 (ca. 1500); H. von Glasenapp, *Die Philosophie der Inder*, Stuttgart: Alfred Kröner Verlag, 1949, S. 195 (um 1500); Y. Kanakura, *Hindu-Buddhist Thought in India*, Yokohama: Hokke Journal Inc, 1980, p. 160 (about 1500 A.D.); *Sarva-darśana-saṅgraha*, edited with an original Commentary in Sanskrit by Mahamahopadhyaya Vasudev Shastri Abhyankar, Government Oriental Series, Class A, No. 4, Poona: The Bhandarkar Oriental Research Institute, 1951, p. 541 (1560). 中村元『原文対訳ヴェーダーンタ・サラー』(平楽寺書店)一九六二年)一三九頁(一五〇〇年頃)、前田専学『ヴェーダーンタ・サラーの哲学』(平楽寺書店)一九八〇年)四九頁(一五〇〇年頃)。

なお、我々が『全ヴェーダーンタ定説の真髄・要集』の下限を十七世紀中頃に置くのは、十七世紀になると『ヴェーダーンタ・サラー』に代

て『ヴェーダーンタ・パリバハーシヤ』(*Vedānta-paribhāṣā*)がよく読まれるようになるからである。中村元『シャンカラ派の総本山ーシュリンベーリー』(『日本印度学仏教学研究』第九巻第一号、昭和三十五年)一九九頁。

(18) 本ウパニシャッドの二・六三(〈現身解脱〉の定義ではない)も『ヨーガ・ヴァーシニヤッタ』三・八・一四と同じであり、この句は更に『ヨーガ・クンダリー』『バインガラ』『ムクティカー』等の諸ウパニシャット『全ヴェーダーンタ定説の真髄・要集』そして『スポーティニー』にも出ているが、『スポーティニー』の著者ヌリシナンサラスヴァティー(Nṛsiṃhasarasvatī)は、明瞭に『「ヴェーシニヤッタ」に曰く』(*vāsisthe*)として引用している。即ち、この句は本来『ヨーガ・ヴァーシニヤッタ』のもので見られていたのである。従って始源は『ヨーガ・ヴァーシニヤッタ』である、そのなら『ベン・ウパニシャツ』が引用したのである。

Cf. *Yogakundaly-upaniṣad* III, 34; *Pañclopaiṣad* III, 3; *Mukti-kōpaniṣad* II, 76; *Sarva-vedānta-siddhānta-sāra-saṅgraha* 979; *The Vedāntasūtra of Sadānanda, together with the Commentaries of Nṛsiṃhasarasvatī and Rāmatīrtha*, edited with Notes and Indices by Colonel G. A. Jacob, 4th edition, Bombay: 1925, p.

なお、本ウパニシャッド・第二章の四五・四六の両句は、第六章の四五と四八に再出する。

(19) 註(19)見たように、両書の引用関係を逆に見る学者もある。これに対して我々は、『ヴィヴェカ・チューダーマニ』と共通の句が纏って現れる『アディヤートマ・ウパニシャッド』四一・六九は、その前の第三〇・四〇が『パンチャ・ダシー』からの引用文で構成されているから、問題の第四一・六九の諸句も引用されたものであらうと考えるのである。『パンチャ・ダシー』は他書を引用する際、その旨を克明に記しているのに、

この場合にはそれが見られないから、右の第三〇一四〇の部分は同書が引用したのではないことは確かである。つまり『アディヤータマ・ウパニシャッド』が引用したのである。

ところで、本ウパニシャッドに『ヨーガ・ヴァーシシヤタ』の前述箇所からの引用は全く見られない。

- 20 一・二・四一・六六・六七・一・三・一五・六・一・一六・六四・六五・一・一七・一五・一・一八・二三・一・二三・四〇・一・二四・七三。このことは外の〈集〉にも認められるが一々の指摘は省略する。なお次の第三項参照。

- 21 vedānta-sāra-sarvasvaṃ purāṇaṃ śaivam uttamam. (I. 2. 2a)
vedānta-sāra-sarvasvaṃ purāṇaṃ śrāyaed abhūtam.

(I. 3. 1b)

- 22 六・一・一五・七・一・一八。また、六・一八・一には「ヴェーダーンタの精髓であり、最高に玄妙なこの秘密を聞いて」という言葉がある。śrūtvā vedānta-sāraṃ tad rahasyaṃ paramābhūtam.

- 23 辻直四郎『サンスクリット文学史』(岩波全書)一九七三年)四二一四三頁。

- 24 辻『前掲書』一五八一六二頁。

- 25 R. C. Hazra, *Studies in the Purāṇic Records on Hindu Rites and Customs*, pp. 181-184.

- 26 前註に挙げたハズラの書、一七九一―一八〇頁。ローチャーは『プラーナ』の中で諸家の説を示しているが、その中ではハズラが最も新しいと見ている(一八七―一八八頁)。但し、ローチャーがハズラの見解として紹介している西暦八〇〇―一〇〇〇年という数字は、厳密に言うところでは正確ではない。
- 27 註26に挙げたハズラの書、一六六、一八七―一八八頁。このプラーナを西暦十五、十六世紀に置くことで専門家の意見はだいたい一致している。

Cf. L. Rocher, *The Purāṇas*, p. 163.

- 28 R. C. Hazra, *Studies in the Upapurāṇas*, Vol. 2, Calcutta: Sanskrit College, 1963, pp. 245-254.

- 29 L. Rocher, *The Purāṇas*, p. 182.

- 30 II. 5. 5. 35. Cf. II. 5. 6. 28.

- 31 namas te gūḍha-dehāya veda-ninda-karāya ca ||
yogācārāya jaināya bauddha-rūpāyōmā-pate ||
namas te kalki-rūpāya mleccānām anta-kāriṇe ||

(II. 5. 16. 11-12a)

英訳では次のようになっている。『前掲書』(註⑤)第二巻、八七四頁参照。しかし、この英訳は正しくない。bauddha-rūpāya ʔ jaināya を修飾する形容詞、kalki-rūpāya ʔ anta-kāriṇe を修飾する形容詞と解すべきであろう。

“Obeisance to the preceptor of Yoga: Obeisance to you, O lord of Lakṣmī, of the form of Jaina and Bauddha; to you of hidden body and features and censurer of the Vedas, Obeisance to you of the form of Kalki; the destroyer of outcaste.”

- 32 この『第二集』では、ヴィシシュヌの十権化の一つである仏陀は名前だけ僅かに生き残った感じである。しかし『第七集』・後編では、仏陀は十権化の中から完全に抹殺され、代りにヴィシシュヌ自身が入っている。七・二・三〇・五八・七・二・三二・一三三三参照。

- 33 平川彰『インド仏教史』下巻(春秋社、一九七九年)二四二―二九頁。

- 34 『第三集』の最終章に二二の「光明リンガ」(Jyotiḥlinga)が出てくる。その中の第七がヴィシヴェーシヴァラで、カーシーに生じたリンガ像である(三・四二・三〇)。そして次の『第四集』では、第二章がヴィシヴェーシヴァラとカーシーの因縁を詳述し、続く第三章で両者の特別

の功德を称賛して「カーシーで死ぬ人には(輪廻の海への)再生はない」(五三偈)と言っている。すると『第二集』の「光明リンガ」への言及は『第三集』および『第四集』の所説を承けているのかも知れない。

63 R. K. Rai *Kulārāja Tantra*, Varanasi: Chowkhamba Sanskrit Series Office, 1983, pp. 49–50. Cf. *Kulārāja Tantra*, Introduction by Arthur Avalon, Readings by M. P. Pandit, Sanskrit Text ed. by Tārānātha Vidyārāṭha, Delhi: Motilal Banarsidass, 1984 (1st edition: London, 1917), p. 137.

64 Teun Goudriaan and Sanjiv Gupta, *Hindu Tantric and Śakta Literature* (A History of Indian Literature, ed. by J. Gonda, Vol. II, Fasc. 2), Wiesbaden: Otto Harrassowitz, 1981, p. 94. 但し、上記の年代の提示者は G. Carlsstedt による。

65 本プラナーナの七・一・一・五九、七・一・一・六二。

66 註64参照。

67 原文に *tada* とあるのは *tatha* の誤植であろう。

68 引用関係について言えば『バインガラ・ウパニシャッド』第四章は前三章と全く趣を異にし、句と句の間に論旨の連がりを欠いて、恰も外の各書から手当たり次第に言葉を寄せ集めてきたかのような印象を与える。事実、四・一一三aは『カータ・カ・ウパニシャッド』三・三三四に相当する。それに四・一九b二〇aも『クラールナヴァ・タントラ』一・一一一と殆ど全同である。従って『バインガラ・ウパニシャッド』の方が引用者であることは間違いない。ちなみに、もし『シヴァ・プラナーナ』が先にあって『クラールナヴァ・タントラ』が借り手だったとするとこの句を『バインガラ・ウパニシャッド』は前者と同じ形で引用したことであろう。なお、これと似た句が『パラマールタ・サーラ』五一や『ヴィヴェーカ・チューダーマニ』五六七にも見られるので、参考のため次に示す。

salile salāṃ kṣīre kṣīram iva brahmaṇi layi syāt.
(*Paramārtha-sūtra*)

kṣīlam kṣīle yathā kṣīptam tailam tale jalam jale,
sanyuktam ekatam yāi tatātmany ātmavin munīḥ
(*Viveka-cūḍamāṇi*)

『パラマールタ・サーラ』はアブhinavagupta (Abhinavagupta) の作であるから、西暦一〇〇〇年前後のものと看做す。『ヴィヴェーカ・チューダーマニ』の句は同音を並べて調子を整えた跡が顕著であり、同類の句の中では比較的後のものであることを窺わせる。

69 註68に引用したハズラの書、三四六頁。

70 たとえば二・一・二・四一七・二・二六・一四七・二・二六・一六等に見られる。しかし『第五集』・第五章では「極めて得難い」(*audurlabha*) と言いつ、特に多くの言葉を用いて人身の貴重さを力説している。

71 『サナトクマール・集』とは本プラナーナ「六集本」の第四集のことである。ハズラは、この〈集〉を『シヴァ・プラナーナ』所属の諸集の中で最も古く八世紀の成立と見ている(五九一六〇頁)。

72 これらの四本は総べて左記の書に収載されていて便利である。それでは此の書をテキストとして用いる。本書には校訂者自身による梵文註釈も含まれているが、これは現代のものであるから考察の対象とならない。また、検討の範囲は第一、第二の両経に対する註釈部分である。

Śrī Aṣṭāyā Vasugupta's Śiva Sūtram, with Five Commentaries, edited with Introduction by Sarvadarshanacharya Śrī Kṛṣṇananda Sāgara, Varanasi: Śrī Om Prakash Saraf, 1984.
73 前註に示した書ではバクッタ・カルラタ (Bhaṭṭa-Kallata) の作とされている。だとすると、本註釈書の年代は九世紀となる。しかしチャテルジやJ・シングは作者不詳とする。なおシングは、この書の作者がクシニエー

- 『シヴァ・ハリーナ』の年代と関係する書(神鏡) Cf. J. C. Chatterji, *Kashmir Shaivism*, Srinagar, 1914, p. 9; Jaideva Singh, *Siva Sūtras. The Yoga of Supreme Identity*, Texts of the Sūtras and the Commentary of Vimarśini of Kṣemarāja, translated into English with Introduction, Notes, Running Exposition, Glossary and Index, Delhi: Motilal Banarsidass, 1979, Preface, p. vii, Introduction, p. xvii.
- 68 R. C. Pandey, *Abhinavagupta, an Historical and Philosophical Study* (Chowkhamba Sanskrit Studies, vol. I), Varanasi: Chowkhamba Sanskrit Series Office, 1963, p. 254.
- 69 J. C. Chatterji, *Kashmir Shaivism*, p. 9; J. Singh, *Siva Sūtras. The Yoga of Supreme Identity*, Introduction, p. xviii. 上記のインズラが記す『シヴァ・スートラ・ヴァールタカ』は、このベニスカラの著作のことで、同名の『第四註釈書』のことではない。
- 49 シングは、このヴァラタラーシャが十五世紀末の人でクリシュナダーサ(Kṛṣṇadāsa)という別名を授けられたと述べているが、根拠は全く挙げていない。 Cf. J. Singh, *Siva Sūtras. The Yoga of Supreme Identity*, Introduction, p. xviii.
- 49 第一節で述べたのと同様、このベニスラが挙げる諸事象は年代が不明確で、年代決定の基準となりにくい。たとえば、彼が指摘する『カーミカ・アーガマ』(*Kārikāgama*)への言及にしても、ホンダはこの書が古く著作なのか後世の著作なのか曖昧なままにしており、ベニスラ自身は同書の年代について全く何も言及していない。
- Cf. J. Gonda, *Medieval Religious Literature in Sanskrit* (A History of Indian Literature, ed. by J. Gonda, Vol II. Fasc.1), Wiesbaden: Otto Harrassowitz, 1977, pp. 184, 201.
- 59 J. N. Farquhar, *An Outline of Religious Literature of India*, p. 226; A. B. Kiehl, *A History of Sanskrit Literature*, p. 448; S. Dasgupta, *A History of Indian Philosophy*, Vol. II, p. 427; K. A. Nilakanta Sastri, *A History of South India*, Oxford: Oxford University Press, 1955, p. 345.
- キースによる『チャトルヴァルガ・チンターマニ』は一二六〇—一三〇九年に書かれたと云う。
- 66 『シヴァ・ハリーナ』については面倒な問題があるが、彼が一四世紀半ばの人であることは確実だと云える。 Cf. T. M. P. Mahadevan, *The Philosophy of Advaita*, Madras: Ganesh & Co, 1938, pp. 2—8.
- 66 『第七集』(卅・一・五・六三)の次の句を見よ。
- Ajño jantur anīṣo'yan ātmanas sukha-duḥkhaḥ ||
īśvara-preṛito gacchet svargam vā śvabhram eva vā ||
この句は『数論偈』(*Sāṅkhya-kāṇḍikā*)六一に対するカラタパーンダの註解書(*Gauḍapāda-bhāṣya*)に引かれており、中村了昭氏によると『大史詩』(*Mahā-bhārata*)三・三〇・八八に相当する。そして更にバーマ・ヤンの『全哲学・要集』(*Sarva-darśana-saṃgraha*)の「シヴァ派の哲学」を紹介する章にも出ている。『シヴァ・ハリーナ』はこの句を『大史詩』から直接引いたのであらうが『全哲学・要集』に援引されているのを知っていたため、この句に対する印象が強かったとも考えられる。中村了昭「サーンクファヤの哲学」(大東出版社、昭和五七年)五〇九頁参照。
- Cf. *Sarva-darśana-saṃgraha* (Government Oriental Series, Class A, No 4), ed. by Mahamahopadhyaya V. Sh. Abhyankar, Poona, 1951, p. 176.
- 66 テキストは左記の書に所収のものである。誤植もあるかもしれないが、今はそのままだと用いる。

G. W. Briggs, *Goraknāth and the Kānpaiḥa Yogīs*, Delhi: Motilal Banarsidass, 1982 (1st edition: Calcutta, 1938), pp. 284–304.

⁵⁴ *The Vedāntasāra of Sadananda, together with the Commentaries of Nṛsiṃhasarasvatī and Rāmānūrtha*, ed. by Colonel G. A. Jacob, p. 19.

『スポーディニー』四〇一四一頁では「天啓書」とともに「副ブラーナ」を引いているが、その際は「天啓書・古伝書」(sruti-smṛiti)からの引用であることを明示している。

⁵⁵ 『ゴラクシャ・シャタカ』の著者ゴラクシャは、だいたい一二〇〇年前後の人と見られている。

Cf. J. N. Farquhar, *An Outline of Religious Literature of India*, p. 254; G. W. Briggs, *Goraknāth and the Kānpaiḥa Yogīs*, p. 250; J. Gonda, *Medieval Religious Literature in Sanskrit*, pp. 221–222.

⁵⁶ その一つは註(9)に述べた。『パンチャ・ダシー』の著者ヴィディヤラシヤはマータハヴァと同時代で、兩人は同一視されることもある。同書の大きな影響力を考え、そして同書と本ブラーナに於て *Svetāvatara-sāhitya* という言葉が置かれている文脈を比較すれば、前者が後者に与えた影響が示唆されるであろう。これは『第六集』に関するものであるが、同様のことが『第七集』にあっても不思議ではない。

『第七集』に関しては註(9)参照。また、『第七集』は一二〇〇年前後の『ゴラクシャ・シャタカ』から引用しているものであるから、本〈集〉を引用しているとされるヘーマードリとの間隔がやや窮屈に感ぜられる。それに、『第七集』は他の諸集の名を挙げているから、その現形成立は相当に後代でなければならない(第三節参照)。これらの点から、『第七集』と

ヘーマードリやマータハヴァとの関係は、改めて考える必要があるように思われる。
なお、この問題については、本書の形状の変化ということも考慮されるべきであらう。